

愛・治山フェスタへの道

2005年の春から秋にかけて、名古屋東部丘陵地域は、日本のみならず世界中からやってきた人で賑わいました。来訪者のお目当ては、「自然の叡智」をメインテーマに掲げた『愛・地球博』。訪れた人は、最先端の科学技術に驚嘆する一方、都市近郊にもかかわらず、そこに残る緑の豊かさにも驚いたと聞いています。この『愛・地球博』の陰の立て役者とも言える豊かな森林こそ、実は愛知県の治山の原点とも言えるものなのです。

かつて、本県は日本の三大八ヶ山県の一つに数えられ、万博会場の周辺にも荒廃地は広がっていました。二度にわたる八ヶ山の歴史（江戸時代から明治初期にかけてと第二次世界大戦とその戦後の時期）を乗り越え、現在のような緑豊かな森林を甦らせたのは、明治後期から現代まで連綿と続いている治山事業であり、先人たちの地道な努力の賜なのです。

このともすれば地味であり、災害でも起こらない限り顧みられることのない仕事を、先人達の功績とともにもっと多くの人に知ってもらいたい、これは治山事業を担当する者の共通の願いでした。

一方、「愛・地球博」の会場ともなった瀬戸市には、本県の八ヶ山復旧に関する歴史的遺産とも言える明治時代に施工された「ホフマン工事」跡地が今も残り、また、大正天皇が皇太子時代、復旧状況視察の折りに立ち寄られたという萩御殿跡地もあります。このホフマン工事が施工されたのが明治38年。西暦に直すと1905年。つまり、『愛・地球博』の開催される2005年は、ホフマン工事が施工されて100年目という節目の年に当たるわけです。

そこで、『愛・地球博』の開催年に合わせ、県としては治山事業全般のアピールを、瀬戸市としては郷土に残る歴史的遺産のPRを目論み、合同で何かをしようと漠然と決まったのが、平成15年のことでした。

平成16年(2004)は、準備期間として位置づけ、次のことを行いました。



1 治山事業公開講座＜5回シリーズ＞

テーマ「森林の荒廃と復旧の歴史から展望するこれからの林人関係」。

5名の講師によるリレー講座。瀬戸市と共同開催。

	開催日時	講師名	内容 タイトル
第1回	9月26日(日) 13:30～16:00	元瀬戸市歴史民俗博物館館長 山川一年	史料から探る瀬戸地域の森と生活 文化の側面から森へアプローチ
第2回	10月10日(日) 13:30～16:00	岐阜大学教授 戸松 修	愛知の治山工事 愛知のハゲ山復旧と治山工事の歴史
第3回	11月7日(日) 13:30～16:00	東京大学愛知演習林長 芝野博文	ホフマン工事とそのふるさと ホフマン氏とヨーロッパの治山工事
第4回	11月21日(日) 13:30～16:00	元愛知県農地林務部技監 鈴木隆司	ホフマン工事・萩御殿現地見学会
第5回	12月5日(日) 13:30～16:00	名古屋大学名誉教授 只木良也	これからの森と人との関わり 森の働き、人との関わり

2 聞かせて！見つけて！教えて！県民参加による森林荒廃と復旧の歴史調査

明治時代等の写真をインターネット等に掲載し、撮影位置を特定していただき、現況と比較した感想を寄せてもらう調査等。

3 ホフマン工事跡地現地調査及び各種資料分析

- ・ホフマン工事跡地現況測量及び時代別復旧状況想定図作成等
- ・「オーストリアにおける渓流工事 / 1911」等の資料分析

4 ホフマン工事跡地及び萩御殿跡地の整備

歩道、説明看板の設置、森林整備等

この中で最も苦労したのは、公開講座でした。専門家や担当者相手の講習会等によく開催されますが、治山の分野で、一般県民を対象としたこのような講座というものは、珍しいと思います。講義内容の検討、講師の選定、そして、なによりも広報の方法が問題でしたが、瀬戸市との共同開催ということもあって、いざ蓋を開けてみると瀬戸市を中心に延べ約330名の方が参加してくださいました。受講後のアンケートによれば、「自分の住んでいる所が昔ハゲ山だったとは知らなかった。」「治山事業の昔からの流れがよくわかった。」等といった感想をもらす人が多く、この地の森林に対して、認識を新たにしようでした。

また、縁は異なるもの...とはよく言ったもので、写真集「オーストリアにおける渓流工事 / 1911」の分析方法に苦慮していたところ、公開講座の講師をお願いしていた芝野先生から、ウィーン留学経験を持つ新潟大学の丸井英明先生を紹介していただく等、公開講座を通じ人の輪も広まりました。

一方、ホフマン工事跡地や萩御殿跡地においても、遊歩道や説明看板の設置等の整備を進め、今後増えるであろう現地見学に備えました。この内、萩御殿跡地には、萩御殿を模した四阿を中心に、明治時代の石えん堤や山腹工跡を巡って治山の歴史を体感できる遊歩道が整備され、『萩殿の森』として生まれ変わりました。

さて、このような成果を踏まえ、いよいよ記念すべき2005年を迎えたわけでありま
す。決定したイベントタイトルは、「愛・治山フェスタ2005 - 森愛なるあなたへ 10
0年のメモリアル」。昨年に引き続き、瀬戸市と連携して実施することとなりました。

目指したのは、専門家をうならすイベントではありません。あくまでも対象は一般県民。
となれば、何よりも会場に足を運んでいただく企画が必要です。そして、フェスタと言う
からには、まず第一に、面白く楽しいものでなければなりません。とはいえ、予算には限
りがあります。では、どうするか？

色々考えた末、多くの人の共感を得ることができ、また老若男女がともに楽しめるもの
として、今回は「映画」を中心に内容を構成することとしました。これは、思ったほど費
用がかからないものです。(ちなみに、2005年は映画が誕生して110年と言われま
す。)あまたある古今東西の作品の中から、フェスタのテーマに沿う作品をじっくり時間
をかけて選定し、2日間で4作品を上映することにしました。(入場は、すべて無料です。)

メインイベントとなる「森林復旧100年記念シンポジウム」でも、通常ならば、基調講
演を行うところを、あえて、パネルディスカッションとアニメ映画「木を植えた男」で構
成しました。

なお、このパネルディスカッションは、公開講座を務めた5名の先生方に加え、その受
講生の中から2名の方に県民代表として参加していただき、専門家のみによる議論を超え
た等身大の内容を期待しました。

また、より多くの内容を盛り込むため、今回は、1,500名収容できるホールを中心に、
7つの大小会議室を持つ瀬戸市文化センターを二日間借り切ることとし、それぞれの会議
室は、勿論、ロビーや屋外スペースも使用して、治山事業PR展を始めとする各種展示や
催しを実施しました。(実際には、準備撤収日をいれて四日間借り切り)これらの催しは、
中部森林管理局、兵庫県治山林道協会、瀬戸こども会連絡協議会、そして足助町木材協同
組合を始めとする各種団体の多大なる協力により実現したものです。(開催記録参照)

ところで、やはり問題は広報活動でした。愛知県の広報誌、瀬戸市の広報誌、各々のホ
ームページ、そしてチラシ配布や駅のポスター掲示、個人的メーリングリストの利用等、
考えられることはすべてやりました。また、前年に公開講座を受講された人には案内を送
付しましたが、これには次の一文を添えました。

「是非、愛・治山フェスタのサポーターとなってください。もしご友人への勧誘、ある
いはご近所の会合等でのPRに必要ならば、チラシを追加して送付させていただきます。
あなた様のお力で、フェスタを成功させ、森愛なる人を増やしていきましょう。」

このメッセージに応じて、多くの方がサポーターとなり、フェスタのPRに一肌脱いで
くださいました。

以上、準備万端?で開催日の7月2日(土)、3日(日)を迎えたわけですが、結果は、主
催者の予想を上回る大盛況となりました。

瀬戸市の企画した「みどりの展覧会」は、「森・川・里山」といったテーマで市内の小
中学生から絵画を募集し、その中から入選作281作を展示するものでしたが、これが、

大きな集客力を発揮しました。子供の絵が展示されれば、親子で見に来るだろうとの読みが的中したわけです。

フェスタのメインイベントでありながら、最もお固い？メニューである「森林復旧100年記念シンポジウム」にも、千葉県を始めとして県外からも多数の方が参加して下さいました。

そのパネルディスカッションでは、テーマを公開講座と同じ「森林の荒廃と復旧の歴史から展望するこれからの林人関係」と設定し、前半を昨年の復習として、講座の内容を各先生方に振り返っていただき、後半は、それぞれの専門や立場を離れて、思うところをフリートークで話し合っていました。



主催者からコーディネーターにお願いしたのは、「これからの人と森林のあるべき姿を模索して、結論めいたものが何となく見えてきたかな？」という感じでディスカッションを終えてください、という曖昧模糊としたものでした。果たして上手く収束できるのかと思っていましたが、そこは、流石に只木先生です。



限られた時間内で、まとめ上げた結論は、「木と森林を活かして使う。これこそが自然の叡智に習うことではないか。」という、まさに、フェスタ開催の趣旨に合致するものとなりました。

二日間にわたるフェスタにおいて、全プログラムに参加した延べ人員合計は、5千人を超えました。沢山のメニューを盛り込み、最後にはサロンコンサートまで組み込んだプログラムは、地方自治体が自力で企画したイベントとしては、かなりユニークなものになったと思います。また、これに向けて蓄積してきた調査結果や公開講座講義録などは、今後も貴重な財産となるものです。参加された方にとっても、主催した側にとっても、今回のフェスタは改めて、あるいは視点を変えて、森林を考える良い機会となったのではないのでしょうか。



さて、ここ数年、『愛・地球博』の影響もあってか、森林を始めとする自然、環境に対する住民の意識は、どんどん高まっています。この流れを大切に、森愛なる人をもっと増やしていく必要があります。一方、歴史ある治山担当に名を連ねている我々も、「あの時代の担当者は、どうも...。」と、後の世の人に言われぬよう、地道に努力を重ねていかねばなりません。

また、2005年は、第二次大戦後60周年の年でもありました。万博は勿論、今回のようなイベントは、平和であればこそ実現できるものです。これからのち100年の間に、日本のみならず世界中から戦乱がなくなり、ホフマン工事200年を記念した「愛・治山フェスタ」が、再び盛大に開催されることを期待して筆を置きたいと思います。

季刊「国民と森林」2005.秋季号 掲載文を加筆修正

Friends Love Believing!
みどり溢れる未来を!

- 愛・地球博 閉会式 エンディングテーマより -